
我と僕の異世界冒険記

D博士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我と僕の異世界冒険記

【Nコード】

N9972G

【作者名】

D博士

【あらすじ】

とある世界で名を轟かす魔王と、現代に住む何の変哲もない少年が異世界に召喚！最強でやりたい放題の魔王とそれに振り回される少年の異世界冒険のはじまり、はじまり。

プロローグ（魔王編）（前書き）

はじめまして、D博士と申します。

小説初投稿です。下手な文ですがよろしくお願ひします。

プロローグ（魔王編）

名も無きどこかの異世界……

彼は全てを支配した。

人を、国を、世界をもその圧倒的な魔力と、全能の知識によって……
その世界全ての生きとし生けるものが彼を恐れた。人々は彼を大いなる邪悪の象徴、魔王と呼んだ……

彼の名は魔王……

魔王ルシア

魔王城

「……………退屈だ。」

玉座に頬杖をつきながら座っている若い男。歳は20歳前後といったところで、その透き通る様な白い肌、闇の様な漆黒の長髪と瞳、整った顔立ちは見る者全てを魅了する程に美しい。
がしかし、その顔は今不貞腐れ随分と歪んでしまっている。

「あの…魔王様如何なされました？」

玉座の下に控えた側近の老魔族がルシアに尋ねた。

「聞こえなかったのか？ 退屈だと言ったのだ。」

「あの…魔王様、お言葉ですがこの状況でその言い分は無いのでは？」

「何故だ？」

ルシアの返答を聞いた老魔族はこめかみを引きつらせながらも、辛うじて平静さを保っていた。

「何故って…よろしいですか魔王様。今現在、この城には貴方様の御命を狙いやつて来た勇者一行との戦闘が起きているのですぞ！ 万が一、奴等がここまでたどり着いたら…」

「どうだと言うのだ、我がそ奴等に負けるとでも？」

目を吊上げ、常人なら気を失う程の殺気を出しながらルシアは老魔族を睨んだ。

「い、いえ！ 決してそのような…」

慌てて首を振った老魔族を一瞥し、ルシアは再び頬杖をついた。程無くして、玉座の間に通じる扉が乱暴に開けられ、4人の人間が入って来た。

「お前が魔王か！」

金髪碧眼で銀色の鎧を身に纏った青年がルシアを睨んだ。

「如何にも、我が魔王ルシアだ。そう言う貴様こそ何者だ？ こちらが名乗ったならば、貴様も名乗るのが礼儀であろう。」

青年の睨みを意に介さず、ルシアは逆に彼らを睨んだ。

「我が名はアシュフォルン・C・レーベルだ！世界を闇に染めし者よ、私の命に代えても貴様を討つ！」

勇者の高らかな宣言を聞き流しながらルシアは改めて勇者一行を眺めた。勇者の他に魔導師の女、それに自分の背と同じくらいの大斧を持った戦士の男、そして白い聖衣を着た女。

「おい！聞いているのか！」

「聞いてないぞ。」

「なっ、ふざけてるのか！」

「我は至って真面目だ。正直、貴様の決意だの信念だのに我には興味が無いのだよ。」

途端に勇者の顔が茹蛸の様に真っ赤になり、腰に下げていた剣を鞘から引き抜いてルシアに向けた。

「ヒッ!?」

「ほっ……………」

剣を見た老魔族が小さい悲鳴をあげ、ルシアも目を細めた。

見る者が見たらすぐに気がついたろう。その剣から溢れる強い聖気を。魔族…闇に生きる者の達にとって、相反する聖気や神気の類いは身体を蝕む猛毒だからだ。

「なかなか強い聖気を出す剣だな。どうやって手に入れたのだ？」

何も答えずルシアを睨む勇者。

「フム…答える気は無いか…まあ、おおよその見当はつく…」

そう言つてルシアは聖衣を着た女を見た。
彼女は直ぐさま身構え、手に持った槍をルシアに向けてた。

「貴様が渡したのか？神族の者よ。」

その言葉を聞いた全員が驚きを露にする。
彼女も啞然としてルシアを見ていたがやがて、フツと目を瞑り力を抜くと身体から光が溢れその背中に純白の一对の翼が現れた。

「何故、私が神族だと気付いたのです？」

「勘だ。」

ルシアの返答に今度は全員が呆れ顔になる。

「別に良からう当たっていたのだから。なんだ、貴様まで。」

見れば、隣りにいた老魔族まで呆れていた。

「…まあ良いです。魔王ルシア、私は女神イシーヌ。天界神連の命により貴方を討つ為に遣わされました。」

「神々が我を討つと？人界に手出しが禁止されているはずの貴様らまでもが…？」

「貴方は、存在そのものが危険すぎる。貴方は知ってはならない禁忌を知りすぎている。だから、神界も掟を曲げてまで私を遣わしたのです。それに、勘違いしないでください。彼らは自らの力と心で此所まで来たのです。私は、その手助けをしたに過ぎません。あまり人を侮らない方が宜しいですよ。」

女神はそう言うと再び槍を構えた。

「……………ク、ククク、クハアハハハハハハハハハハ！」

突然笑い始めたルシアに勇者達は身構えた。

「ハハハハハ……ここで貴様らを葬つても同じだろうな……憐れだな貴様らは。我を討つという名目を与えられ、その実ただの使い捨ての駒に過ぎんのだからな。」

「何だと!!！」

「違つと言つのか!?では聞くが、貴様らを送り出した者達は貴様らが死ねばもう何もしないのか?そんな筈はあるまい。再び勇者を用意し、魔王討伐と言つ名目を持たせてまた別の者がやって来るだろう。女神よ、貴様も同じだ。一度干渉した天界は我を滅ぼすまで神族を差し向けて来るだろう。ハハハハツ……これが笑わずにいられるか?我は我という存在が消えるまで永遠のイタチゴッコをしると言っただぞ。」

『……………』

誰も何も言えず、ただルシアの言葉が彼らの胸に重くのし掛かった。

「ククク…今更分かり切つた事だったが…我はつくづくこの世界に疎まれているらしいな…なあ貴様ら、考えた事があるか?自分自身の存在というものを?」

「何……?」

「存在だよ。どんな者も授かりし生を否定される事は無い。だが我は否定された。何故だ?それは力を得たからだ、禁忌と呼ばれる知識を得たからだ。だが、我とて好き好んで得たわけでは無い。解るか?ある日唐突に人知を超える力と知識を得た者の気持ちだが、その為の世界から拒絶された者の気持ちが……解るまい、絶対に解るものか!!！」

それは独白だった。恐らく誰にも話したことの無いルシアの心の内。老魔族も勇者達も、今この時だけは何も言えなかった。

「……………随分とお喋りが過ぎてしまったな…さあ、そろそろ始めようか。我は誰にも否定させはしない。否定すると言つのならは何処までも抗ってくれよう！来るがいい勇者よ、我を討てるものなら討ってみよ！」

ルシアはそう言つと勇者達に向かい合つた。

「…望むところだ魔王ルシア！俺達はお前を倒し平和を勝ち取つてみせる！」

ルシアも勇者達も戦闘態勢に入り辺りに一触即発の雰囲気が漂う。そして、ルシアが勇者達に先制攻撃を行おうと身構えた時、自分の身体に異変を感じた。

(なんだ？身体が何かに引っ張られているのか？)

「ま、魔王様！？」

老魔族が酷く驚いた顔でこちらを見ている。そして勇者達までも啞然としてこちら…否、ルシアの後ろを見ていた。

「ん？……………ほお、これは……………」

そこにはポツカリと直径が約、3m程の黒い穴が開いている。しかし、それは地面に開いた落とし穴では無い。ルシアの真後ろに空間を割る様に現れたのだ。

「あれは…皆気をつけて、あの穴は時空の裂け目よ！吸い込まれたら別の次元に飛ばされてしまうわ！」

「…これは、チャンスかもしれないな。」

穴の正体を感じ取った女神は仲間達に注意を呼び掛ける中、自身を今にも飲み込もうとする穴を見ながらルシア呟いた。

「グラトウール。」

「は、はい！」

老魔族…グラトウールの名を呼んだルシアは彼に笑いかけた。

「私の命を聞く全ての魔族をこの城に集め魔界に引き上げる。これが、我からの最後の命令だ。」

「な、何をおっしゃるのです魔王様！その程度の束縛貴方なら…」

「もう良いのだ。今日まで良く仕えてくれた…ありがとう。」

「ルシア様……」

グラトウールが弱々しくルシアの名を呼んだ。その目には涙が流れている。

そして、ルシアは勇者達に目を向ける。

「後は貴様らの好きにするがいい。我はこの世界と決別することにする。」

「な、何だと！？ま、待て！魔王！！！」

叫ぶ勇者を尻目に穴から眩い光が溢れ、ルシアを包んだ。

「ふっ……新たな世界か…せめて、我を退屈させぬ世界であれば良いがな。」

最後の眩きは誰の耳にも届かず、光が収まった時魔王ルシアの姿は何処にも無かった。

「…………ふ…ふざけるなー！！こんな終わり方納得出来るかー！！」

残された勇者の叫びが主を無くした城に虚しく響いた。

プロローグ（魔王編）（後書き）

と言うわけでプロローグ、魔王編でした。

「おい。」

おや、ルシア君。お疲れ様！

「随分と中途半端な始まり方だな。」

まあまあ、そう言わないで。

「あの勇者供はどうするのだ？」

あ、彼ら多分これで出番終わり。もしかしたら、気が変わって再登場させるかもしれないけど、だとしても当分後になるね。

「憐れだな。つくづく…」

さあ次回は君の相方が登場するよ。

「フム。どんな奴が楽しみではあるな。」

それじゃまた次回もよろしくお願いします！

「さらばだ諸君！」

プロローグ（現代編）

「おい、優弥。一緒に帰ろうぜ。」

「うん。今準備しちゃうから、ちょっと待ってて。」

夕焼けに紅く染まる町並みを教室の窓から眺める少年、名前は真城しんじょう優弥ゆうみや。この麻枝和礼学園2年A組に所属している。制服である白いブレザーを着て、余り整えていない黒髪で両手首に黒のリストバンドをしている。一方、教室の入口から優弥を呼んだのは、ボーイッシュに短くまとめた茶色の髪、男勝りな喋り方をしてはいるがれっきとした女の子だ。

名前は西城恵理さいじょうえり。優弥の従姉妹で、現在祖父母の家に2人とも同居している。

これといった部活に所属してはいない優弥に対し恵理は女子剣道部に所属しているので、本来帰る時間は2人ともバラバラだが時々待ち合わせをして一緒に帰っている。

「お待ちせ。」

「じゃあ、帰ろうぜ。急がねえと祖父さんに怒鳴られちまうぜ。」

2人の祖父、神宮司真衡じんぐうしただひらは自他共に認める厳しい人で、神宮司流剣術の師範である。その道の人間なら知らない者はいないとされる程の達人だから、優弥と恵理にとって目下1番恐れている人なのだ。

「それでよ、そいつに言っっちゃったんだよ。文句があんなら実力で来いってな。」

「恵理に真っ向から挑んで勝てる人なんて祖父ちゃんくらいなものじゃん…」

「何言っただ。優弥だっけ強いだろ。」

夕焼け空の下、2人は今日あった出来事を話しながら帰路についた。

「僕なんてまだまだだよ。恵理にも負けた回数の方が多いよ。」

「それでも、口ばっかで実力がともなつてねえ男子剣道部の不抜けどもに比べりやずつとましだよ。」

そう言つて、恵理は優弥の背中をバシバシと叩いた。優弥は痛そうに目を瞑つたが、それでも口は嬉しそうに笑っていた。

そして、2人の日常は今日も何の変化もなく終わる……はずだった

……

「あ、あれ……？」

「どつし……ま、優弥!？」

不意に立ち止まった優弥。恵理は如何したのかと尋ねようとして優弥の現状を見て驚愕した。

優弥は空間を割るように開いた黒い穴に今にも飲み込まれようとしていたからだ。

「優弥!?!?!」

「来るな!?!?!」

駆け寄ろうとする恵理を優弥が叫んで止めた。長い付き合いだが優弥がこんな大声を上げたのは初めてだった。

「来ちゃだめだ!」

「で、でも……」

「この穴はヤバイ!!すぐに離れて!!」

「嫌だ!優弥を置いて行ける訳無いだろ!?!」

優弥の静止を聞かずに恵理は優弥の手を掴んだ。次の瞬間、穴から眩い光が溢れてきた。

「クソ…恵理、ゴメン!!」

優弥は恵理の足を払って転ばせて無理やり繋いでいた手を離させた。

「ま、優弥!!!」

「ゴメン…恵理……」

「ま、待って!行っちゃだ…行かないで、優弥!!」

その叫びも空しく、光が優弥を包み込んだ。

「優弥 ……!!!」

光が消えた時、そこには穴も優弥も消え去り後には夕日に染まるいつもの街角と、その場に崩れて泣きじゃくる恵理が1人だけ残った。

プロローグ（現代編）（後書き）

はい。と言う訳でプロローグ、現代編でした。

「あの〜…」

なんですか？優弥君。

「魔王編のと比べて内容が薄いような…？」

そりゃしゃあないでしょう。魔王と学生じゃ内容に高低差が出ても

「いやでも、僕らが何で祖父ちゃんと暮らしてるのとか、学園の説

明をもう少し入れてもよかつたんじゃない？」

これは異世界冒険ものであって学園生活ものじゃないの。それに君の過去だってもう少しストーリーが進んでから入れるならともかくこんな初っ端に入れてもしょうがないじゃん。

「いやでも……」

「そうだ！納得いかな ！！」

あらら恵理ちゃんもいらつしやい。で、何が納得いかないの？

「如何して俺と優弥が離れ離れにならなきゃいけないんだよ！」

いやだつて…その方が盛り上がるじゃん。

「ふざけんな ！！」

わあ！？待って、待って！君はいずれあつちの世界に連れて行くから！！

「あ、本当だろうな？」

もちろんもう少しストーリーが進んでからになるけどそれは保障するよ。

「……解ったよ……」

「恵理、またいつか会おうね……」

「……うん……」

はあ〜……恋する女の怒りは怖い……

「え？誰が恋してるの？」

それはまたいずれ…って、この状況で解らんか…まあ兎に角、次回

はついに優弥君とルシア君が対面するよ！

「一体どんな人なのかな？」

それじゃ次回もよろしくお願いします！

「お願いします！」

第一話 そして出会った2人（前書き）

第一話投稿です

第一話　そして出会った2人

優弥視点

「う、うう……」

気がついて真つ先に感じたのは硬い鉄の地面だった。こんな寝苦しいベッド買った覚えは無いんだけど……
寝ぼけているのか頭が随分と重い。

「って、寝ぼけてる場合じゃないか……」

改めて周囲を確認する。全面が鉄で作られた何も無い部屋で、天井にお情け程度の電球がぶら下がっている。どうやら牢屋の中らしい。

「何で牢屋なんか監禁されてるの……？」

何でこんな場所に閉じ込められているんだ？えっと……確か、学校が終わって恵理と帰る約束をしたから教室で待ってて……それで、恵理の部活が終わって2人で……そうだ！その時穴みたいなのがいきなり出てきて、僕はそれに飲み込まれて……そういえば、恵理は大丈夫だったかな。此処にいないって事は巻き込まずに済んだみたいだけど……きつと怒ってるだろうな……

怒る恵理の顔が容易に想像でき苦笑しつつも少しホツとした。

どうしようかと考えていた時、突然扉が開き男が2人入って来た。どちらの男も紫色の軍服と思いき立襟のコートを着て、頭には服と同じ紫色のベレー帽を被っていて、その手にはライフルらしき銃を

抱えた。

「やっと起きたみたいだな。」

男の1人が銃を構えつつ話しかけてきた、もう1人も無言でこちらに銃を構えている。

「中尉がお待ちだ。一緒に着て貰おうか。」

拒否は許さないと言わんばかりに銃を突き付けて来る。

銃の事に詳しい訳では無いが此処から見た感じ、どうやらモデルガンの類いでは無いらしい。そして、逆らえばこの2人は間違いない僕を撃つだろう。彼らの出す殺気がそう物語っている。

「わかりました…」

此処が何処なのかわからない上、僕が置かれている状況すら把握していないのに殺されてはかなわない。とにかく、今は逆らわず状況を確認するとしてよう。

男達に連れられ通路を歩く。ちなみに、今僕の前に話しかけてきた男が歩いていて、もう1人が後ろから銃を構えてついて来ている。通路は全面がさっきの牢屋と同じ鉄製で所々に換気用のダクトがあった。それから、さっきから地面が低い振動をしている気がする。

一体此処は何処なのか…

「ついでぞ。この部屋だ。」

考えている間にどうやらついたらしい。

さっき閉じ込められていた牢屋の扉とさして変わらない頑丈そうな扉の前に男は立ち止まると、その扉の横に備えられた呼鈴らしきボ

タンを押した。

「中尉。連れてきました。」

「入ってよろしい。」

スピーカーから低いドスの効いた声が答えると、扉が開いた。

「さあ、入れ。」

後ろの男に促されて部屋に入った。中は非常に広く四方の壁側に何らかの機械が沢山置かれ、それを白衣を来た科学者風貌の男達がいじっている。中でも目を引いたのは、中央に置かれた円柱型の巨大な機械だった。それから無数のコードやらパイプらしき物が周りの機械に繋がれている。

「気分は如何かな？随分と長くお休みだったが。この場合おはようと言うべきかな？最も、普通の者ならまだ寝ている時間だがね。」

円柱を見上げていた僕に声をかけて来たのは先程スピーカーから聞こえた声だった。ただ、ドスが効いている割りには物腰は穏やかそうだ。頬から頬にかけて真一文字の傷がある男で、服装は男達と同じ紫色の軍服とベレー帽。だが、彼の軍服には肩章が着いていた。後ろにいた2人は近付いて来た男に敬礼すると彼の後ろに下がって行った。

「私はヴィオル中尉。この部隊の指揮をとっている者だ。君の名前を覚えてくれないかね、少年。」

「真城優弥です……」

ヴィオルと名乗った男は、まるで品定めをするかの用に僕を睨んで

いる。正直嫌な感じたが、此処は一体何処なのか、彼らは一体何者なのか、そして僕の身に一体何が起きたのか…疑問は山程あり、今の所それに答えられるのは彼だけなのだから。

「自分の身に一体何が起きたのか知りたがってる様だね？」

見透かしたかの様にヴィオルがニタニタ笑いながら見て来る。

「はい。貴方達は一体何者なのか、そして、此処は一体何処なんですか？答えてください。」

その解答に満足そうに頷くヴィオル。

「良いですね。話がスムーズに進むのは気分が良い。よろしい、質問に答えましょうか。まず、マサヤ君…君が置かれた状況ですが…結論から言うと、此処は君がいた世界では無い。」

その言葉に驚愕する反面どこか納得する僕がいた。予測はあった…しかし、それを認めたくは無かった。

だってそうなれば元の世界に戻るかどうかわからないからだ。もう祖父ちゃんや祖母ちゃん…恵理に会えない…そう思うととても恐かった…

「君はアレに召喚されたんだよ。」

そんな僕の気持ちなどお構いなしに話を続けるヴィオル。

彼はさっきの円柱型の機械を指差してそう言った。

「あれは、別世界のモノをこの世界に持って来る事が出来るんだが、我々は異界接続機と呼んでいる。アレに召喚された物を異界物、人

を異界人と呼んでいるのだが…今から約数時間前、アレがいきなり動き出してね。まあ、要するに暴走を起こした訳だが、その時召喚されたのが君なんだよ。」

ヴィオルの説明を聞いてほんの少しだが光明が見えた。異世界のモノを持って来る事が出来るなら逆に戻す事も可能かもしれないからだ。

「さて、ここからが肝心なのだが、こいつは物凄くエネルギーを喰うんだ。本来、きちんとした設備で万全の状態じゃなければ動かす事が出来ないはずなんだが…」

そう言っつて再びこちらを見た。

「失礼だが、君が寝ている間に君を調べさせて貰ったよ。しかし、結果はハズレ。君はこの世界に生きている人間達と身体的には何一つ変わらない。そけで質問なのだが…君はこの世界にやって来た時の状況を聞かせてくれないか？」

とりあえず彼の話で解った事は、僕がこの世界に来たのは事故の様なもので、彼らもなんで僕が召喚されたのか解っていないらしい。とにかく、僕は一刻も早く元の世界に戻して貰いたかった。だから彼の質問に正直に答えた。

「むう…やはり今までの異界人達と同じか…やはり今回もコイツの気紛れか。」

「あ、あの…お願いします。僕を元の世界に帰してください。」

「ああ、それなら心配する事は無い。」

ヴィオルはそう言っつて後ろの兵達に目配せした。その時、何だか言

い知れない嫌な感じがした。兵達は無言で頷くと、こちらに近付いて来て銃を向けて来た。

「なっ!?!」

「君にはここで死んで貰う。」

「そ、そんな!なんで…!」

「我々はね。組織のメンバー以外に存在を知られる訳にはいかないんだよ。たとえそれが…この世界の者じゃ無いとしてもだ。まあ、怨むのならこれの暴走に巻き込まれた自分の運の無さを怨みたまえ。」

ヴィオルが片手を上げると、それに従って兵達が銃の引き金に指をかけた。

愕然とした。こんな事で僕は死ぬのか…

嫌…嫌だ!そんなの嫌だ!…まだやり残した事も、やってみたい事も沢山あるんだ!

死にたくない!死にたくない!!

その時、円柱…異界接続機から眩い光が溢れ部屋を包んだ。

「な、何だと!これは…まさか!」

腕で目元を覆ったヴィオルが異界接続機を睨んだ。

「中尉!また暴走です!こちらのコントロールを全く受け付けません!」

後ろにいた白衣姿の男達が慌ただしく機械を操作するが光が収まる気配は無かった。

「バカな… 1日に2度もこんな事が起こるとは…」

「ち、中尉！」

「今度はなんだ!?!」

「物凄いエネルギー反応です！測定器が振り切れました！これは過去に前例が全くありません！何が出て来てもおかしくないですよ！」

そして、溢れていた光が前触れ無く消え去り辺りはしばしの静寂に包まれた。

僕は閉じていた目をゆっくり開けた。まださっきの光で目がチカチカしてる。やがて、目が慣れて辺りが見れる様になって気がついた。あの機械の前に立つ人影に。

「……………」

とりあえず真っ先に思った事は黒い人だなと思った。上下共黒い服でしている手袋も黒、さらに裏地まで真っ黒のマントでおまけに黒く長めの髪の毛の全身真っ黒け。服には所々に装飾があるけどそれも黒の引きたてになってる。そして、それと正反対の透き通る様な白い肌。顔立からして男だ。それも格好いい部類に入ると思う。

彼は瞑っていた目を開いてこっちを見て来た。うわ、目まで闇みたいに真っ黒だよ。

「……………さて、どうするかな……………」

……………それが僕と彼…魔王ルシアとの出会いだっただけ……………

ルシア視点

目を開けるとそこには、紫色の集団と何やらそいつらに銃を向けられた少年が一人いる。

「な、何だ貴様は！」

紫達の中でも一際柄の悪そうな男が我を睨んで来た。ふん、生意気なモノだ。

「人に名を尋ねるなら自分から名乗れ。」

「ぬ…私はヴィオル。この部隊の…」

本当に名乗りおったな随分と単純な男なのだ。

「おい！聞いているのか！」

「聞いてないぞ。」

「な…」

あの勇者と同じ反応をする奴だな。顔を赤くして肩をフルフルと震えている男を無視して、こちらを唾然と見ている少年の方に目を向けた。

「あ、あの…」

「我を呼び出したのは貴様か？」

「え、いや…どうも、その機械に呼ばれたみたいですけど…」

そう言つて、我の後ろを指差した。

指先にあつたのは何やら円柱の形をした物体で、確かに我を飲み込んだあの穴と同じ力を感じた。

「中尉、あの男から計測不能な強大な魔力が…」

「で、でもどうして僕を助けてくれたんですか？」

「別に助けた訳ではない。あいつらが邪魔だったから片付けただけだ。貴様を残したのも説明して貰うためだからな。それで…一体どういう状況か説明してくれるかな？」

「えっと…とりあえず此処から逃げませんか？」

「…それもそうだな。では、外に出たら知っている事を話して貰うぞ。」

「は、はい。」

さて…ではこの壁を破壊して脱出するとするかな。我が再び呪文の詠唱を始めようとした時

「っ！危ない！！」

少年が我を突き飛ばした。そして、それと同じくして銃声が響き、少年の右腕を銃弾が掠めた。

振り替えると、先程の男が拳銃を構えている。

ふざけた真似を！沸いてきた怒りを男に向けると、ヒツツと怯んだ隙について腹に一撃を食らわせた。男が倒れた事を見届けると少年の方に近寄った。

「大丈夫か！？」

「は、はい。ほんの少し掠めただけだから。」

一応袖を捲らせて傷を確認したが確かに掠り傷だった。

「全く無茶をする。あの程度の攻撃何ともないというのにな…しかし、誰かに庇われるなど随分と長く忘れていたな…ありがとう。」

貴様の名を聞いておこうか。我はルシア。魔王ルシアだ。」

「ま、魔王？」

「恐ろしいか？」

「ううん。少し驚いたけど怖くはないよ。僕は真城優弥。優弥って呼んでよ、よろしくルシア。」

「フ、フハハハハ！よろしくか。人にそう言われたのは久しぶりだ。全く面白い奴だな貴様は。こちらこそよろしく頼むぞマサヤよ。」

我々は互いに固い握手を交わした。

「では、しつかり掴まっている。」

「解った。」

我はマサヤに腕に掴ませると天井に呪文で穴を開けた。その穴から空気が抜ける様に風が巻起こった。我は浮遊術を唱えそこから外に出た。

「あ、あれは!？」

ここに来て我々がいた場所の全景が見えた。それは巨大な飛行船だった。我々の出て来た穴などその船の巨体に針穴を開けた程度のモノだろう。

「あんな所にいたなんて……」

「ふむ…弱めの呪文を使ってよかったな。さっきはあれごと吹き飛ばしてやるうと思っていたからな。」

「じゃあ下手したらあれと一緒に地面に墜落してたかもしれないんだ……」

顔を青くするマサヤ。

「とにかく、地上に降りるぞ。」

「うん。」

そして、我々は地上に降りて行った。

こうして、我の新世界への旅路は1人の少年との出会いから始まったのだった。

続く

第一話　そして出会った2人（後書き）

はい。と言う訳で第一話でした。

優「はあく死ぬかと思っただ…」

ル「我はまだ暴れ足りんな。」

ご心配なく。ルシア君にはこれからバンバン暴れて貰うから。

ル「では、楽しみにさせて貰うぞ。」

優「でも結局どういう世界なのかとか、そういう話は全然なかったね。あの連中だって解らなかつたし。」

まあ、それは次回と言う事で。次回は一緒に旅する仲間が登場するよ。

ル「ほう。それは楽しみだな。」

優「じゃあ次回もよろしくってことで」

またよろしく願いします！

第二話 最初の朝は晴れ後戦闘（前書き）

遅くなりましたが第二話です。

第二話 最初の朝は晴れ後戦闘

謎の兵士達が操る巨体飛行船から脱出した2人は、夜の闇の中を飛んでいた。

「ルシア。暗くて全然見えないけど大丈夫なのか？」

「案ずるな！我も見えておらん！」

「いや、見えておらんってダメじゃんそれ！」

「冗談だ。」

からかわれ気味だが優弥には不思議と不安は無かった。

「こんなに高い空を飛んでるのに風の影響が殆ど無い。これもルシアの魔法なの？」

「そうだ。障壁を張っているからな。今使っている浮遊術は対象を飛ばす魔法だが、これだけだと風圧を正面に受ける事になる。だから空を飛ぶ時は障壁の併用が不可欠なのだ。もし、この高度でこの速度を障壁無しで飛んだりしたら人間なら数分であの世行きだ。」

シレッと恐ろしい事を言うルシアに、優弥の顔が引きつった。

「心配せずとも、もうすぐ地面だ。森の方に降りるぞ。」

「え、町とかに降りた方が良くんじゃない？」

「さっきの連中が追って来る可能性もある。別に町中でも構わんが、私の魔法は加減が利かないのが多い。もし、連中と戦闘になったら町ごと吹き飛ばしてしまうが…それでも構わんなら町に降りるぞ？」

「……森にしよっか…」

「賢明だな。」

森に降りた2人は、とりあえずこれからどうするか考える事にした。

「で、これからの事だが…とりあえず、夜が明けるまで貴様は休んだ方がいいな。」

「え、でも…」

「マサヤ、貴様気づいていないようだが顔色がえらいことになってるぞ。」

「え!？」

「まあ無理もない。貴様、戦慣れはしていないようだからな。あんな状況にあつて今まで気を持っていられたのが不思議なくらいだからな。とにかく、しばらく寝てる。朝になったら我が起こしてやる。」

「けど…それじゃルシアに悪いよ…」

「案ずるな。それに夜が明けたらやらねばならん事も色々ある。その時倒れたりされる方が迷惑だ。わかつたら休め、いいな。」

真弥はまだ何か言いたそうだったが、ルシアにジト目で睨まれてあえなく撃沈した。

ルシア視点

マサヤは最初の方は起きていたようだが、暫くするとスウスウと寝息を立て始めた。ずいぶん気が滅入っていたはずだというのに人の心配とは…お人好しな奴だ。

我は立ち上がって呪文を唱えた。

唱え終わると同時に我々の周りに不可視の結界が張られた。これで、

獣やモンスターがいたとしても我々の存在に気付く事はない。

「では…私も寝るとするかな…」

木の幹に背を預け目を閉じた。そう言えば…グラトウール達は どうしているだろうか…世界を捨てはしたが奴らは我を慕ってくれていた、気にならないと言えば嘘になる。どうやらこの世界でも我の魔法は問題なく使えるようだから、いずれ召喚魔法で手頃な奴を呼んで我のことを報告させるか…

そうこう考えている内に我も眠りに落ちていった。

一方、2人に逃げられたヴィオル中尉達はというと…

ルシアのダークネスボルトを受けた兵士や研究員達は、全員医務室行き。研究室には大穴が開けられ立ち入り禁止状態。そんな中、目を覚ましたヴィオルは通信室に向かった。

「本部！本部！こちらフォルディア方面輸送部隊3152！応答願います！」

通信室にある通信機械は真弥の世界の物と微妙に違って、マイクとスピーカー、チューニングを合わせるボタン等があり、真ん中に青白く光るクリスタルが備えてある。

「…ガガ…ガガピー…こちら本部、輸送部隊3152、ヴィオル中尉どうしました？」

やがて、雑音を流していたスピーカーから声が響いた。

「緊急の要件だ！至急長官に繋いでくれ！」

「しかし、長官は只今……」

「緊急だと言っているだろう！いいから長官に繋げ！」

通信機の向こうにいた男は、了解と叫ぶとバタバタと走っていく音が聞こえた。しばらくして……

「こんな時間に叩き起こすとは一体どういっつもりだヴィオル中尉。」

スピーカーから先ほどの男とは違うくぐもった男の声が響いた。

「申し訳ありません長官。しかし、どうしてもお伝えしたいことがあります……」

「言ってみる。」

それからヴィオルは真弥とルシアの事を説明した。

「フーム……接続機の二度の暴走と、そこから現れた2人の異界人か……」

「はい。1人は人間で名を真城真弥。もう1人は素性はわかりませんがとてつもない魔力の持ち主です。」

「……で、貴様はその2人をムザムザ逃がしたと……？」

「う……申し訳ありません。」

「ふん！まあ良いわ。その2人のことはこちらで検討する。貴様は、接続機端末を支部に運ぶ任務を続ける。」

「しかし長官。奴らの始末はこの私に……」

「いいから貴様は任務を続ける！良いなヴィオル中尉。」

ブツッ

通信機が切れ、辺りにしばらくの静寂が訪れた。

「……クソッ！」

ヴィオルは乱暴にマイクを叩きつけた。

「あのガキ共今にみている……この私が必ず始末してやる！」

翌朝

「おい、起きろ。」

「う……うん……」

「起きると言っつのが……」

「ンア………?」

「わからんのかー！」

「ンギヤアアアアア……!!?!?」

ルシアから放たれた雷が真弥に直撃した。

「あっあっあっ……」

真弥は黒こげになり煙を吹いた。

「酷いよルシア〜……」

「直ぐに起きないからだ。」

「それにしたって起こし方は他にもあるだろ〜……」

「そう怒るな。それより、これからの事を考えよう。」

その頃、ルシア達から少し離れた森の中を進む影が3つ。

「今回の依頼、本当に受けて良かったの？」

1人は金色のウェーブのかかった長髪で蒼色の瞳の女性で腰に下げた剣が彼女が剣士であることを示してある。

「仕方ないでしょ。ギルドからの直接の依頼なんだから。」

もう1人はローブ姿で朱色の髪を三つ編みにした魔導師の女性。

「……………」

最後の1人は巫女服を着て腰から短刀を下げた黒髪の少女。

3人はどんだん森の奥へと進んで行ったが、不意に巫女服の少女が立ち止まった。

「どうしたの、音羽？」

「この先から強い邪気を感じる…」

音羽と呼ばれた少女は顔を強ばらせながら森の奥を睨んだ。

「モンスター？」

魔導師の問い音羽は首を横に振って答えた。

「違う…もつと異質で…もつと邪悪な気配…」

その答えに2人の顔が強ばる。

「何にせよ…用心した方が良さそうね。」

3人は何時でも戦えるように気を配りながら先に進んだ。

その頃、その邪悪な気配の張本人はと言うと…

「ファックション！」

「大丈夫ルシア、風邪引いたんじゃない？」

「いや…誰か私の噂でもしているのかもしれないな。」

「アハハハ。で、これからどうしよつか？」

「そうだな…まず情報が必要だ。我らはこの世界の事を何一つ知らないのだからな。」

真弥視点

今までに僕とルシアは互いのことを話し合って今後のことを話し合っていた。

「こんなことならあの時奴らを拷問でもして洗いざらい吐かせておけば良かったな。」

「過ぎたことを言っても仕方ないよ……」

「そうだな…兎に角…?」

話し合っていたら、急にルシアが黙り込んで辺りを伺い始めた。

「どうかしたのルシア?」

「伏せる!!」

急にルシアが僕の頭を掴んで強引に下げた瞬間、僕らの頭上を火の玉が通り過ぎた。

「なっ!?!」

「何者だ!?!」

起き上がって火の玉が飛んできた方を見ると女の人がある人いた。

「…避けられた…」

「この距離で音羽の術を避けるなんて!?!」

「ただ者じゃないって事ね…」

その3人は明らかに敵意を向けてきた。もしかしたら、昨日の奴らの仲間?

「いきなり攻撃して来るとはどういうつもりだ？」
「そつちこそ、魔族がこんな処で何をしてるの？」

腰から剣を下げていた女の人を抜いてこつち向けて構えた。

「ほう…我が魔族と見抜いたか。」

「私達は騙せても音羽は巫女よ、どんなにうまく化けても欺けないわよ！」

隣にいる巫女服の女の子を見ながら杖を持った女の人をもその杖を構える。

「…邪気…退散…！」

その巫女服の女の子も右手に短刀、左手に御札を持って僕らを睨んだ。

「ふん…身の程知らずが。マサヤ、離れている。」

ルシアもやる気満々だ。もうヤダ…昨日からこんなのはつか…

「悪いがこちらも取り込み中でな…1分以内にケリを付けてやる。」

「ほざくな！」

「喰らいなさい！」

「…御覚悟！」

結論だけ言うと勝ったのはルシアだった。

まず向かってきた剣士さんの攻撃を避けて、彼女の首に手刀を入れ

て倒すと、一瞬で魔導師さんの前に移動してネコダマシで驚かして詠唱を止めて彼女にも手刀を入れた。

最後に残った巫女さんが、さっきの火の玉を御札から出したけどルシアの障壁に難なく防がれた。その隙にさっきの様に一瞬で彼女の前に移動する。巫女さんも短刀で攻撃しようとしたけど、ルシアは彼女の右手を捕んでそれを防ぐとその額に頭突きをした。3人が倒れたところでトドメに雷を落として終了。

昨日も思ったけど…ルシア、君強過ぎだよ…

「…クツ…クソツ…」

「ウウ……………」

「…ン…ンンウ……………」

「クツハハハハハ！何だ口程にもない。この程度で我に挑もうなど片腹痛いわ。」

ボロボロになって地面に倒れる3人をルシアがケラケラ笑っている。あの人達つくづく哀れだな…

「さて…2度と刃向かう気が起きないように…お仕置きしてやるわ！」

「…ヒイツ！…!!??」「…」

「待つてよルシア。」

互いに抱き合って脅える彼女達を流石に見かねて慌てて止めに入っ

た。「何故止める？」

「もう良いじゃない。これ以上やったら完全に弱いもの虐めだよ。」

「又ウ……………」

「それにさ、彼女達に聞こうよ、この世界のこと。」

「それもそうだな…おい貴様等、さっきのことはこれで勘弁してやる。その代わり、我らの質問に答えてもらう。もし、もう1度刃向かったらその時はこんな物では済まないと知れ！良いな？」

3人はルシアの脅しにアカベコのようにコクコクと頷いた。

「スイマセン…連れがご迷惑おかけして、僕達はあなた方に危害を加えたりしませんから、僕達の知りたいことを教えてくれませんか？」

視点解除

ルシアと変わって3人の前に屈んでお願いする真弥に彼女達は互いに顔を見合って訝しんだ。

「僕の名前は真城真弥です。あなた達の名前を教えてくださいませんか？ほら、ルシアも。」

「ヤレヤレ…我が名はルシア。とある世界で魔王をしていた者だ。」

こうして、彼らの異世界での最初の朝は騒がしく過ぎていった。

続く

第二話 最初の朝は晴れ後戦闘（後書き）

はい第二話無事終了〜！

ル「結局あの娘達は何なのだ？」

ゴメンね。本当はこの話で彼女達を仲間に入れるはずだったんだけど色々あつて次回に持ち越しって事で…

ル「相変わらず当てにならない奴だな貴様は。」

グハアツ！！

真「まあまあ…次回を楽しみにまとうよ。」

おお！流石この話最大の良心真弥君！

真「ま…次がいつになるか分かんないけど…」

ナアツ！！君までそんな…

ル「グズが。」

……………チクシヨ〜！！覚えてろよ〜

ル「逃げたか…」

真「じゃあ、僕達が変わりに、今回も御覧いただき有り難うござい

ます。次回もどうぞ宜しく。」

ル「また会おう。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9972g/>

我と僕の異世界冒険記

2010年10月10日01時48分発行